

## ■ 報告 ■

若手の舞台芸術家を招聘して、地域住民との交流を中心に取材をし、一週間梶原町に滞在していただき、その成果を高知県唯一の木造の芝居小屋「ゆすはら座」で作品発表を行いました。招聘したアーティストが鈴木翔媛さんという日本舞踊家・俳優で、奥がコーディネーター・演出・出演で、牛島青がコーディネーターと制作を担ってくれました。

このイベントをやるにあたっての課題が、梶原町は高知市から片道2時間かかります。市内で面白いことをやっても、お子さん連れや高齢者の方が多いので、何か観に行こうというきっかけが選択肢の中からなくなってしまうくらいアクセスしづらい場所にあります。また、「ゆすはら座」は木造の芝居小屋、すごく綺麗なのですが全然見つけてもらえなくて、レンタル料も安いのですが見つけてもらえないのがすごくもったいないなと思っていました。

では、梶原町に課題じゃなく可能性は何かあるかと考えた時に、私の周りだけでも、梶原町に来たアーティストの方が、梶原町、ゆすはら座で何かしたいという方が多く、また津野山神楽という1110年以上続いている神楽があり、そのような眠っている文化が町内6地区でたくさんあります。私たちは移住者なのですが、よそ者から見るとめっちゃめっちゃ面白いことに梶原町は溢れています。

今回、私たちがアートで出来ることは何だろうと考えた時に、アートに出来ることというのは見えないものを見えるものにするのではないかと考え、イベントを行いました。では、見えないものとは何かということで、各地区に閉じている伝統の文化や、そもそも住んでいる人たちがそれに対してどういう想いをしているのか。梶原町が開拓されてから1113年(\*)です。1113年、全く名前の残らない人たちが地道に続けてきた文化や生活の声を聞き取ることは出来ないだろうか。それを見えないものと捉えて取材をしました。今回のイベントは取材と交流と創作という3つの柱で進めていきました。町の文化協会に取材をするために、いろいろなサークルや史談会一町の歴史をまとめている方々がいて、その方々と繋げてもらえるように交渉しました。

実際、津野山神楽保存会で神楽大会というのがあったので、取材にお邪魔させていただいたり、大蔵谷地区にある三番叟の練習が、ちょうど神祭の時期で練習をたくさんやっていたので、各地区のいろんなお祭りの練習を見学させていただきました。「茶堂」というのがありますが、そちらを保存されている皆さんの見学や取材もしにいきました。一週間のなかでほとんど取材と交流がメインだったのですが、図書館でもイベントをやりました。図書館の隣のケアハウスで日本舞踊を鈴木さんに踊ってもらって、すごい諸先輩方にたくさん地元のお話を聞いたりして交流をしました。

本番では「ゆすはら座」で45分間の「やまのこえ」という舞台公演をしました。ひらひら舞っているのは梶原に和紙職人のロギール・アウテンボーガルトさんという方がいらっしゃるのですが、ロギールさんから和紙を提供していただいたり、すごくたくさんの方にご協力いただきました。

広報の一番は関係者からというのが多くてほぼ手配りで、いろんな所へ取材に行って取材先で30、40枚お渡しして、その結果、私たちも当日「30人くればラッキーだね」と思っていたのですが90人以上の方にいらしていただいて、広報という面ではほぼ手配り、ほぼ対面、ほぼ直接

やり取りをするという形で広報をしていきました。今後の展望は、このようにたくさんの資料が集まったので冊子にまとめたいと思っています。私たちだから行けたところが、役場の方や図書館の方では行けないところに私たちなら行けるとするのは、今回の大きな発見だったので、そこで集めた資料を今後まとめていけたらいいなと思っています。

\*津野経高が梶原の地に入り、開拓を行った延喜 13 (913) 年から数える

## ■視察委員の意見・質問■

当日、行ってみて驚きました。ひとつには非常に大勢の皆さんが来場されていたこと。老若男女、高齢者の多い地域なのですがお年寄りに限らず若い方たちも含めて幅広い年代の人、報告書によると90名、これだけの人数、素晴らしいと思います。

また、舞台と観客席を反転させて、観客は舞台にあげられて何が始まるのだろうかというワクワク感の中で、入り口の外の風景もひとつの絵画のように見えるようなところからスタートし、1階2階をフルに使った、非常に斬新でもある公演で、見ごたえのある 45 分間でした。

終わった後、皆さんの表情が非常に満足度の高い、すごくいいものを観させてもらったなというような表情をされていたのが印象的でした。確かに、アンケートを見ますと、「梶原の良さをすごくよく表現してくれた」と、「梶原の住民でよかったな」と思えるような声がかかなり多数入っているのを見てもやはりそうだったんだな、と。

特に、アンケートで印象に残ったのが、地元のお子さんたちにも踊ってもらった際、「その子どもたちの着物の着付けがだらしなくてちょっと可哀そうでした」という意見がありました。ここは批判というよりはその後続く「ご相談ください」、これは非常にお二人が地元にしかりと入っているという表れかと思います。是非お手伝いしますよという声が未来に繋がる。非常に地道な取組、また気配りでやってこられた成果がこうした声にも表れているのではないかと思います。「地域×アート」という、まさに狙いがしっかりと実現できた非常に素晴らしい取り組みだったと思います。(鎌倉浩昭副委員長)

## ■会場からの意見■

●雲の上の図書館での演奏で何度か行かせていただいているのですが、庁舎も素晴らしく、自由に弾いていいピアノがありますね。天井が凄く高いので、空から音が降ってくる素晴らしい空間で、芝居小屋は残念ながらあまり響かないと思うので、音楽向きではないですね。響かないジャズ演奏とかにはいいかもしれないですね。ロックは向かない。

—音楽イベントもやってはいらっしゃるんですけど、音楽向きではないかもしれないです。

庁舎はすごく良いんですね。ただ庁舎なのでお金は取れないですね。

(儲けを出したらいけないので、もらえないです。)

せっかくピアノもあって、すごく良い空間なので、何か良い利用方法がないでしょうか。

●今回のように「ゆすはら座」だけではなくて、他の場所でのイベントも、1週間の中でいろんなことをやるって形であれば、役場でやって、結果、そこから集客に繋げるとか。今回も図書館でのイベントから集客に繋がるというのがあったので、梶原はなんでもやってみてという方が多いので。